

日本における無子率の動向と無子女性の特性に関する分析

Trends and Characteristics of Childless Women in Japan

守泉 理恵（国立社会保障・人口問題研究所）

Rie MORIIZUMI (National Institute of Population
and Social Security Research)

e-mail: moriizumi-rie@ipss.go.jp

『出生動向基本調査』（国立社会保障・人口問題研究所実施）は、現在有配偶の女性（初婚、再婚）を調べる夫婦調査と、現在独身者（未婚、離死別）の男女を調べる独身者調査で構成され、両者を合わせるとすべての配偶関係の女性に関する各種属性の集計が可能となる。今回の分析では、夫婦・独身の両調査において、調査時点までの総出生子ども数が得られる第10回（1992年）、第13回（2005年）、第14回（2010年）の調査データを用い、無子女性割合の動向や、無子女性の特性に関する分析を行った。

45～49歳で子どものいない女性の割合（ほぼ生涯無子割合とみられる）は、第10回で7.9%、第13回で10.4%、第14回で12.4%と近年ほど高まっている。女性の出生年別に集計すると、1940年代生れは5～6%、1950年代生れは7%程度であるのに対し、1960年代前半生まれでは12.1%に急増している。1960年代後半生まれは、まだ45～49歳の標本が少なく安定的な結果が得られないが、40～44歳の無子割合をみると18.4%に達している。これは1960年代前半生まれの同年齢時点の15.8%を上回っていることから、今後も日本の生涯無子割合は増加することが予想される。また、この数値をOECD Family Databaseに掲載されているOECD各国の1960年代後半出生コホート女性の無子率と比較すると、日本はスペイン、オーストリア、イギリス、フィンランド、アメリカなどに次ぐ上位グループに位置していることがわかる。

次に、40～49歳の女性について、独身者は結婚または同棲経験、結婚意思、希望子ども数の有無、有配偶者は理想・予定子ども数の組合せ別に集計を行い、意図した無子女性と意図せざる無子女性の特定を試みた。生涯無子割合の上昇が始まる前の1942～52年生れと、急増が始まった1960～70年生まれ的女性について比較したところ、(1)子どもを持ちたいと思いながら、おもに結婚の先送りをしたまま40代となり「意図せざる無子」となっている女性が増えている、(2)両コホートとも「意図した無子」の女性が無子女性全体の約3割を占める、(3)高齢・健康上の理由・不妊といった身体的阻害理由による無子女性割合は、全体の構成比でいうと若い世代の方が低い、等の変化が見られた。

また、1960～70年出生コホートの女性について、意図した無子女性、意図せざる無子女性、有子女性の3グループについて、様々な属性（居住地ブロック、学歴、きょうだい数、学卒直後就業状況等）の分布を比較し、各カテゴリの特徴について検討した。意図した無子女性では一人っ子が多めである、意図せざる無子女性では大卒以上が多い、有子女性では学卒直後に正規職に就いた割合が高い等の傾向が見出された。

出生率の動向において、無子の影響は大きくなってきており、より精密な分析が望まれる。